

ミニシンポジウム「研究のプロセスと舞台裏」
座長解題

堀田和彦*

今回実施予定のミニシンポジウム「研究のプロセスと舞台裏」はそのタイトルからもわかるように、これまで実施されてきた農業や食料の根幹に関わる問題を対象としたシンポジウム等とは大きく性格の異なるものである。本ミニシンポジウムでは、日本農業経済学会において、学会賞を受賞された会員より受賞対象業績の研究プロセスに重点を置いた報告を頂き、若手研究者、大学院生の研究の発展および、中長期的な研究キャリアの形成に資する議論の提供を目的とする。同時にそれは、シニアの研究者も含めて、研究者間の研究成果および研究過程に関する相互理解を深める機会とすることを目的としている。

具体的には2019年度、2020年度に学会賞を受賞された李哉洙氏（鹿児島大学、2020年度学術賞・学会誌賞受賞）、大仲克俊氏（岡山大学、2019年度奨励賞受賞）に、研究の着眼点とそのきっかけ、資金の獲得方法、学内・学外業務と学会賞受賞業績形成過程との関連、研究業績全体の組み立てや構想の時期、作業プロセス、重要であったサポート、苦勞した点、新たな発見、および、その後の研究の展開等について可能な範囲でご報告頂く予定である。これらの報告に対して、若手の研究者お二人（今野聖士氏（名寄市立大学）、上西良廣氏（農研機構・企画戦略本部））にコメントを頂き、どのようなプロセスやノウハウを活用し、学会賞に値する研究業績を構築していったか議論を深める予定である。さらに、学会賞を審査する側がどのような視点で研究業績を評価しているのかも簡単に紹介する。これらの議論を通して研究プロセスとその舞台裏とも言える実態を明らかにし、若手研究者の研究の発展および、中長期的な研究キャリアの形成に資する具体的な議論を提供するのが本シンポジウムの目的となる。

本シンポジウムはこのように研究の形成過程、プロセスに重点を置き、議論をおこなうため、報告頂くお二人の研究内容そのものの議論は十分おこなえないものと思われる。そこで、お二人の研究業績をここで簡単に紹介しておきたい。李哉洙氏の受賞対象業績は『EU青果農協の組織と戦略』日本経済評論社、2019年10月30日発行である。本業績は、森

* 東京農業大学
k3hotta@nodai.ac.jp

嶋輝也氏、清野誠喜氏との共著で、EUの青果物の集荷・販売を担う大規模農協組織（以下、青果農協）の組織再編とブランド戦略について、スペイン、イタリア、ドイツ、オランダの4か国、15事例の多岐に亘る運営実態を詳細に分析したケーススタディを、3部13章にわたって取りまとめた成果である。本書はEUの農協の販売事業を取り巻く外部環境の変化に応じ、農協自らがいかなる組織構造・事業戦略を選択してきたか体系的かつ実証的に分析したものである。

続いて、大仲克俊氏の受賞対象業績は『一般企業の農業参入の展開過程と現段階』農林統計出版、2018年2月22日発行である。本業績は、農業参入企業の展開やその背景、要因、成果、限界について、統計資料ならびに豊富な現地実態調査結果をもとに、農業参入企業の展開過程にアプローチしながら分析を行った研究である。本研究では、一般企業の農業参入が進展した要因の分析、参入目的や経営全体における農業部門の位置づけ、農業経営の実態について分析を行っている。また、地域での連携やネットワークをもとに経営展開をとげている参入企業の実態、参入地域との関係構築の重要性、地域農業の発展への貢献可能性等について検討をおこなっている。

本ミニシンポジウムを通して、多くの研究者がその研究プロセスやノウハウ等を学び、学会賞に値する研究業績を多数生み出し、学会の研究活動が活発化することを期待する。本ミニシンポジウムは近年、若手研究者のシンポジウム離れ等を危惧し、学会が企画した大胆なテーマでもあり、若手研究者の多くの参加と活発な議論を期待したいところである。